

山之内和明	(株)中山製鋼所	小谷 幸雄	苫小牧工業高等専門 学校	古川 武	〃
野村 修	日立造船(株)	沢入 操	群馬工業高等専門学校	八代 一司	〃
古川 了	日特金属工業(株)	四十谷吉則	少年工科学学校	佐藤 彰	東京大学大学院
黒岩 俊郎	アジア経済研究所	北田 昌邦	千葉工業大学	平岡 照祥	〃
三坂 克彦	古河電気工業(株)	学 生 会 員			〃
伊藤 敦	国光製鋼(株)	駒村 宏一	名古屋大学工学部	射場 毅	大阪大学工学部
村上 英二	東洋刃物(株)	西尾 浩明	〃	岡本 晋	〃
小林 俊郎	富士電機(株)中研	樋口 充蔵	〃	平田 靖彦	〃
長谷川啓治	(株)日立製作所	樋口 充蔵	〃	戸崎 秀男	東北大学工学部
西山 政昭	愛知製鋼(株)	水上 義正	〃	川崎 千歳	〃 大学院
福井 英彦	協和窯業(株)	浅井 滋生	名古屋大学大学院	清野 隆	東京電機大学
川本 信	大阪府立大学	井口 義章	〃	小林 正孝	千葉工業大学
石橋 保博	九州大学	岡村 正義	〃	栗木 武男	名古屋市立大学大学院
戸沢 康寿	名古屋大学	市川 秀昭	早稲田大学理工学部	外 国 会 員	
				Walter R. Ruston (Belgium)	

書 評

「鉄鋼迅速分析法統一付解説」

日本学術振興会編

日本学術振興会製鋼第 19 委員会第 1 分科会 (分析) では昭和 31 年, かねて同分科会で検討, 審議し, いわゆる「学振法」として決定した鉄鋼関係の分析法 131 をまとめ, 「鉄鋼迅速分析法統一付解説」として刊行したが, その後の約 10 年間にさらに約 2000 編の研究報告が提出され, 検討, 審議の未決定された分析法が 102 の多きに達したので今回続編として上記「鉄鋼迅速分析法統一付解説」が出版された。

内容は第 1 編鉄鋼分析では C, Si, P, Cu, Ni, Cr, Mo, V, Co, Al, Ti, As, Sn, Sb, Pb, Zr, B, Nb, Ta, Ca, Mg, Se, Be, 希土類元素, S, 第 2 編塩基性鋼滓分析では FeO, Fe₂O₃, 全鉄, Al₂O₃, CaO, MgO, MnO, P 塩基度測定, 第 3 編高炉滓分析では SiO₂, Al₂O₃, CaO, MgO, MnO, TiO₂, S, 第 4 編フェロアロイ分析では Fe-Mn 中の Mn, Fe-Ni 中の Ni, 金属 Ni および Fe-Ni 中の Co, Fe-W 中の W, Fe-Mo 中の Mo, 第 5 編製鉄, 製鋼原料分析では鉄鉱石中の As, Sn, 焼結鉱中の As, 砂鉄中の V, マンガン鉱中の Mn, 鉱石類中の Si, 第 6 編鉄鋼中のガス, 非金属介在物分析では N, AlN, 第 7 編試料採取法では酸素定量用の真空採取法, ヒシヤク汲出鑄型内鎮静法, ポンプ法, ヒシヤク内鎮静スポイト吸上法, ヒシヤク内鎮静鑄込法, 水素定量用の真空採取法, 汲出鑄込法, スポイト吸上法となつている。

これらの成分の分析に用いられた方法は吸光光度法が主体となつているが, その他キレート滴定法を含む容量法, 重量法, 炎光法, ポーラログラフ法などがある。そしてこれらの分析法は委員会独自で開発した独創になるもの, 内外の文献から鉄鋼分析に適するように改良したものなどからなりたち, 最新の理論, 技術に基礎をおいているものが多く, 目新しく清新な感じを受ける。

しかも, これらの方法は単に新奇をてらうだけのものではなく, 委員会の検討, 審議を経て決定された評価済みの完成されたもので, 直ちに現場に適用して良好な成果が得られるのが特長である。

なお, 本書の標題で「迅速分析法」とうたつてはいるが, 内容は必ずしも時間的な早さのみに重点を置いたものばかりではない。精度, 確度の改善, 微量分析, など分析関係者の当面するすべての問題点を解決しようとする努力がなされ, それに重点を置いた方法も多い。このことはこの「学振法」が「JIS法」の母体となつていることの多い事実からもうかがうことができる。

さらに本書において, ガス分析のさい問題となつていた試料の採取法が, 関係委員の努力と長期間の検討によつて一応解決し, 前記第 7 編に挙げられた方法が決定, 収録し得たことも, 特長のひとつと数えることができる。

鉄鋼関係の分析に従事する技術者, 作業員の必携の参考書といえると思う。(若松茂雄)

(A 5 版, 600 ページ, 定価 2500 円, 丸善(1966))